浅野昼夜銀行の安田財閥への譲渡

齊藤　憲

はじめに

浅野昼夜銀行は、大正十一年八月十五日安田財閥に譲渡され、日本昼夜銀行と改称された。本稿の目的は、浅野財閥の機関銀行と目された同行を、なぜ安田財閥に譲渡しなければならなかったのか、その意味を明らかにすることである。

筆者は、以前浅野総一郎の伝記と浅野財閥の歴史を内容とする拙著を発表した。[1] イギリスへの留学直前であったこともあって時間に追われ、そのため同著では、この間の経緯について浅野泰治郎・良三『浅野総一郎』の記述をもとに「浅野昼夜銀行の経営には、安田善次郎は批判的であった。総一郎に向かって銀行業兼営の非を述べ、実業家として終始するように切言したという。総一郎は安田の忠告を容れ、同行の一切を安田家に譲渡することになった」[2]と簡単に触れただけにとどまった。

しかし『安田保善社とその関係事業史』や富士銀行の行史、由井常彦編『安田財閥』ではその間の経緯を説明しており、先の記述では不十分のそしりは免れえない。幸い富士銀行の好意で日本昼夜銀行『当行沿革』及び関連資料を閲覧できたので、買収の原因やその経緯について新たに稿を起こして、ここに詳論することにしたい。

一　研究史の整理

まず簡単に研究史を整理しよう。最初に挙げなければならないのは、その後の研究の土台ともなった、『安田保善社とその関係事業史』中の該当部分である。少し長い引用になるが、譲渡の経緯が明らかになるので、「沿革」と「経営引受」の全文を次に掲げよう。(3)

明治三一年九月八日、神奈川県足柄下郡吉浜村に資本金一〇万円をもって設立された吉浜銀行は、小田原支店と湯ケ原出張所を有する地方小銀行として推移してきたが、大正二年三月同行の業務一切と二店舗を駿河銀行に譲渡し、本店を東京市京橋区に移転して日東銀行と改称した。しかし、まだ開業に至らない同年五月、さらに第五銀行と改称して経営者が交替し、六月一日から普通、貯蓄両業務兼営のもとに営業を開始した。同行は鶴見総持寺の機関銀行といわれるが、業績が上がらなかったため、同行の専務取締役橋本梅太郎は知己の初代浅野総一郎に経営援助を求め、四年四月浅野の役員就任によって同行と浅野との関係は次第に密接になった。翌五年四月に資本金一〇〇万円に増加するに際して経営権は浅野の手中に帰し、行名も日本昼夜銀行と改称、翌五月には全役員を改選して浅野の女婿白石元治郎が頭取に就任するに及んで、名実ともに浅野系銀行として経営されることになった。当時、浅野は別に貯蓄、普通両業務兼営の日本昼夜貯蓄銀行（大正元年十一月三十日開業、設立当時は中野武宮経営）を経営していたが、たまたま五年一月「貯蓄銀行条例」の改正によって貯蓄銀行業務の条件が制限され、普通銀行においては兼営が許されなくなったため、両行の普通、貯蓄両業務をそれぞれ相互に移譲し合い、同年十月に日本昼夜銀行は普通銀行として京橋区尾張町に移転し、同時に行名が示す昼夜営業制（営業時間午前九時～午後八時）を採用して発足した。この昼夜営業の構想は、米国フィラデルフィア市におけるハリマン夫人が創始した〝Through Night's Bank〟を範としたもので、前記の日本昼夜貯蓄銀行がまず採用し、普通銀行としては日本昼夜銀行が本邦最初の試みとして採用した。六年九月には資本金を五〇〇万円に増加、翌七年三月には浅野昼夜銀行と改称（同時に傍系の日本昼夜貯蓄銀行も浅野昼夜貯蓄銀行と改称、大正十

一年八月安田貯蓄銀行に合併消滅）し、本店を日本橋区通一丁目に移転、越えて九年一月には一〇〇〇万円に増資して浅野総一郎が白石元治郎と交替して頭取に就任した。しかし、このころ第一次世界大戦後の反動不況によって預金が減少する一方、浅野関係諸会社の資金需要が増加すると同時に、これらが固定化し、いきおい資金が枯渇するに至って、機関銀行たる当行の経営は、次第に急迫を告げてきた。

大正十年五月、浅野が社長であった東洋汽船株式会社はドイツからの賠償船太洋丸を引受け、同船の初航海に浅野は初代善次郎を招待し、ともに上海およびマニラを視察した。船中においてたまたま当時経営不振の浅野昼夜銀行に談が及び、善次郎から事業家の銀行兼営が危険なることを説得された浅野は、同行の経営を善次郎に懇請した。そして、両者の約束により、引受調印日を九月二十九日と予定していたのであったが、はからずもその前日、善次郎の大磯凶変によって万事は中断され、浅野昼夜銀行は約一年間苦難の道を歩んだ。しかし、結局において両者の約束を実現すべく、十一年八月に至り、保善社は同行の経営を引受けることとなった。同月十五日に全役員の改選を行ない、頭取に安田善四郎、専務取締役には故総長との約束経緯を熟知していた斎藤恂が就任、行名を日本昼夜銀行と再改称し、本店を再び京橋区尾張町に移して、安田傘下銀行として再発足することになった。

吉浜銀行としての創立から、日東銀行、第五銀行と名称を変更し、やがて浅野財閥傘下の銀行となった経緯、昼夜貯蓄銀行との関連、昼夜営業制という特徴ある経営方法、反動不況下の預金減少や浅野関連各社の資金需要増加とその固定化、安田善次郎の説得と経営移譲の約束、善次郎の死、そして一年後の買収と、この間の動きが理解できる。

しかし浅野昼夜銀行買収の原因については、「第一次世界大戦後の反動不況によって預金が減少する一方、浅野関係諸会社の資金需要が増加すると同時に、これらが固定化し、いきおい資金が枯渇するに至って、機関銀行たる当行の経営は、次第に急迫を告げてきた」と書く一方、「善次郎から事業家の銀行兼営が危険なることを説得された浅野は、同行の経営を善次郎に懇請した」とも書かれている。主要な要因は経営危機に関する救済だったのか、それとも浅野財閥の経営難を背景としつつも、安田善次郎の浅野総

一郎に対する説得に中心があったのか、この文面だけでは明らかではない。

小早川洋一「浅野財閥の多角化と経営組織――大正期から昭和初期の分析――」[4]は、浅野財閥研究に先鞭をつけた業績であるが、そこでは『安田保善社とその関係事業史』に依拠して浅野昼夜銀行を位置づけつつ、「時事新報」や商業興信所『日本全国諸会社役員録』、帝国経済通信社『全国銀行会社事業成績調査録』などを使って同行の資金運用や払込資本金利益率などを計算している。[5]資金運用の動向としては、割引手形、貸付金、保有有価証券の比率変化から、大正十年上期中に浅野昼夜銀行の運用に大きな変化が現れたこと、払込資本利益率でみると、大正六年末から十年上期末までほぼ一〇%内外であり、またこの間ほとんど七分の株式配当を継続しているとしている。ただしこれらの変化や数値の意味づけはなされておらず、したがって変化の要因や配当率と経営の安定などとの関連は不明であるし、譲渡された大正十一年度に関しては、数値は示されていない。浅野が銀行経営を断念した理由として、十年上期末から十一年一月末にかけての二〇〇〇万円から一二一〇万円という大幅な預金減、浅野系諸会社に対する貸金の固定化、安田善次郎の説得、が並列的に述べられている。つまり浅野昼夜銀行の経営状況をある程度までは明らかにしたが、基本資料を欠き、完全には説明できなかったと考えられる。

昭和五七年に刊行された『富士銀行一〇〇年史』の記載には、いくつかの新しい指摘を見ることができる。[6]まず日本昼夜貯蓄銀行の設立経緯で、同行は、明治一六年神奈川に創立された相陽銀行が、大正元年十一月東京に移転し、商号を変更したものとされ、翌年白石元治郎が社長に就任したと説明されており、浅野一族が経営する以前の歴史が理解できる。

次に浅野昼夜銀行の経営不振と、安田が経営を引受けた理由であるが、頭取に就任した浅野総一郎は、大正九年七月から十二月にかけて赤坂、亀戸、浅草、神田、芝の五支店を開設、預金増強に努めたものの、同年十二月に生じた東京地区の銀行恐慌に巻き込まれ、その際安田銀行の資金援助を受けたこと、十一年に入り、浅野関連会社の整理資金融通などの取扱いで事態が急迫したので、結城豊太郎副頭取は井上準之助日本銀行総裁と協議し、保善社において同行の経営を引受けることに決定したとされている。同行

譲渡は、安田善次郎と浅野総一郎両者の約束を実現したというよりも、同行救済の意味が強かったというわけである。

昭和六十一年に刊行された『安田財閥』[7]で、小早川洋一はさらに一歩進め、日本昼夜銀行『沿革大要』[8]（稿本）をもとに次のように書いている。[9]

同行（浅野昼夜銀行のこと――筆者）が大幅増資をした直後の大正九年三月、反動恐慌が勃発すると、同行は保有有価証券（主として浅野系企業の株式）の暴落、貸付金の不良債権化、浅野系企業への救済融資資金の増大などにより、経営内容がにわかに悪化した。これに対し、浅野から救済融資の要請を受けた善次郎は、同年末、それに応ずることでとりあえず同行の急場を救い、さらに翌十年、浅野総一郎を説得して同行を吸収することに意思決定している。

もっとも、その契約は、締結直前の同年九月善次郎が急死したので、安田としてはこれを一度は破棄している。ところが同行は、その後の支店開設などの経営努力にもかかわらず、再三、経営危機におちいり、そのつど安田から救済融資を行わざるをえなかった。そして翌十一年五月末頃には、同行は「日本銀行ニ対シテモ何時閉店ノ悲運ニ陥ルカ測ラレザル旨ヲ報国スルニ至レル」程の窮状を呈し、井上準之助日銀総裁からの要請もあり、結局、結城も同行の経営引受けを決定した。

そして浅野の経営難に対する安田の援助は、昭和初期に生じた安田財閥の危機的状況を形成した重要な要因ともなったとしている。[10]つまり基本的な譲渡の要因を、同行の危機救済にすえたことになる。しかし具体的な数値は浅野同族会社の貸借対照表と損益計算書だけで、累積赤字の著増が指摘されているにすぎない。安田財閥史を叙述する著書であるから当然ではあるが、浅野財閥を研究する立場からすれば、意を尽くしていない。つまり浅野昼夜銀行の窮状は、反動恐慌の結果なのか、それとも浅野総一郎の放漫経営にあったのか、明らかではない。

本稿では、日本昼夜銀行『当行沿革』を軸に、以上の研究史をふまえて同行の経営について明らかにしていきたい。

二　浅野昼夜銀行へ至る過程とその経営

まず浅野傘下の金融機関となった経緯から見ていこう。

前掲『安田保善社とその関係事業史』によれば「業績が上がらなかったため、同行の専務取締役橋本梅太郎は知己の初代浅野総一郎に経営援助を求め、四年四月浅野の役員就任によって同行と浅野との関係は次第に密接になった」とあったが、『当行沿革』には「橋本氏ハ東洋汽船ニ在テ活動シタル結果、浅野家ニ取入リ、遂ニ同家ヲ当行ニ引入レ」た[11]、とあるから、橋本梅太郎の画策によって浅野財閥の関連ができたと考えられる。橋本は後に浅野物産副社長や同社の子会社日本舗道の取締役を兼任する人物であるが、その経歴はつまびらかではない。明治四十一年業績不振の責任をとって東洋汽船社長を罷免されそうになった浅野総一郎を、「踏み留まって責めを果たして貰わなければならぬ」と株主総会で発言して社長に留任させ、恩を売った人物である[12]。

橋本が入行したのは大正二（一九一三）年五月六日、浅野総一郎の長男泰治郎が、浅野一族として最初に取締役に就任したのが同年六月二七日のことであるから、当初から浅野の経営を前提に橋本は入行したとも考えられる。翌三年八月には浅野家の番頭の一人である藤堂大蔵が新支配人となり、四年四月には泰治郎に代わって浅野総一郎が取締役に就任した。そして「大正五年四月百万円ニ増資シテ日本昼夜銀行ト改称シ、白石元治郎氏頭取ニ就任シテ、愈浅野家ノ機関トシテ経営セラルルコトトナレリ」。五年当時の株主名簿がないので、七年七月現在での旧株二〇〇〇〇株の株主を示すと、株主数二二名で、浅野総一郎一〇五〇〇株（五二・五％）、白石元治郎三〇〇〇（一五）、浅野合資会社一〇七〇（五・四）、橋本梅太郎一〇二〇（五・一）、浅野泰治郎、鈴木紋次郎各一〇〇〇（五）となっており（以上で持株比率八八％）、その他も浅野一族や関係者であるから、五年当時もこれとあまり変化がないと考えてよいであろう。浅野一族によってほぼ完全に支配された金融機関であった[13]。

大正六年九月五〇〇万円に増資し、十一月には綿貫吉秋を日本銀行から副頭取に迎えて体制を整備し、翌七年三月浅野昼夜銀行と改称、八年十一月には交換所組合に加入して業務の基礎を確立した。

かくして業容は順調に推移し、第一次大戦下の好況のもとで発展を続けたが、その過程で将来を暗示する傾向が現れ始めた。『当行沿革』によれば、六年十二月三十一日現在の「貸借対照表ニ就テ之ヲ観ルニ、諸預金一〇六五万余

円諸貸出金一五一五万余円ニ達シ、之ヲ日東銀行当時ニ比スレバ長足ノ進歩ヲ示セリ、然シナガラ貸金膨張セル為メ、借入金再割引等二七五万余円ヲ計上シ、早クモ銀行本位ニアラズシテ、事業家ノ金繰機関タル本能ヲ発揮スルニ至レリ」とある。すでにオーバーローンの傾向が現れていたのである。

第1表、第2表、第3表は、浅野昼夜銀行と改称された時から日本昼夜銀行と改まる時までのそれぞれ浅野昼夜銀行貸借対照表、損益計算書、利益処分を示している。[14] 第1表同行貸借対照表中、七年上期の借入金、再割引手形合計は六年下期と比較してさらに増加し、四三三万余円（全体の一九・四%）に達しており、八年上期からはコールマネーまで取り入れて対応している。負債全体に占める比率は八年上期（三二・七%）、同下期（一九・七%）を境に減少を示すが、その後も一〇%以下になることはなかった。

八年上期八八三万円に達した借入金、コールマネー、再割引手形の合計額は、八年下期には五六〇万円と約三〇〇万円減少し、それに対応して諸貸付金および割引手形の合計額も減少するが、これは貸金を有価証券に振り替えた結果であった。「所有有価証券二九八万余円ヲ増加セシガ、決シテ新ニ市場ヨリ買求メタルモノニアラズシテ、翌年増資セントスルニ当リ、其払込ノ関係上、同族会社ニ対スル貸金激増スベキガ故ニ、従来ノ貸金ヲ減少セシメンタメ、同族会社所有ノ浅野セメント株一一三〇〇株一株九〇円替、東洋汽船株一一三七〇株一株八五円二〇銭替、浅野造船所株一〇〇〇〇株一株一〇〇円替ニテ譲受ケ、代金ハ同族会社ニ対スル貸金ト振替ヘタルモノ」で、翌大正九年三月、公称資本金五〇〇（払込二〇〇）万円の浅野昼夜銀行は、公称一〇〇〇（払込六二五）万円と倍増されたが、その資金はこうして捻出されたのである。かくして八年一二月末現在旧株（五〇円払込）一〇七〇株、新株（一二・五円払込）九四〇〇株所有していた浅野同族会社は、九年七月現在旧株（五〇円払込）九万五二九〇株、新株（一二・五円払込）一〇万株、持株比率九七・六%、を所有することになった。[15] この間の動きは、第1表の有価証券および資本金の増加に現れている。同表によると、その後も有価証券額は増加し、九年下期に減少を示すものの、十年上期からは五五〇万円台を維持している。

このような資金重要に対する何らかの操作は、浅野昼夜銀行だけにとどまらなかったと想像できる。第一次大戦に

第1表　浅野昼夜銀行貸借対照表（『営業報告書』各期より作成、単位：1000円）

	7上	7下	8上	8下	9上	9下	10上	10下	11上	11下
〈資産〉										
諸貸付金	9,523	14,073	16,571	11,744	13,917	12,941	16,834	19,579	18,893	18,344
コールローン	100	110		100	430	1,280	830	400	200	10,200
割引手形	8,413	6,874	6,342	8,611	9,117	8,723	5,396	5,248	8,244	1,635
預ケ金	913	321	738	165	960	833	942	915	838	409
有価証券	832	1,141	1,247	4,510	6,102	5,106	5,540	5,509	5,587	5,517
現金在高	384	586	850	1,055	1,081	1,430	1,693	2,067	2,319	3,497
その他	136	974	1,227	2,286	1,082	1,313	1,897	2,286	1,996	1,324
合計	22,301	24,081	26,976	28,471	32,690	31,626	33,132	36003	38,076	40,925
〈負債〉										
資本金	2,000	2,000	2,000	5,000	6,250	6,250	6,250	6,250	6,250	6,250
諸積立金	41	103	163	,223	298	402	487	570	634	217
諸預金	13,522	16,375	14,436	15,107	19,406	19,156	20,003	22,174	24,099	27,251
支払承諾		751	1,048	1,995	922	1,022	1,451	1,500	1,026	6
借入金	2,410	3,340	3,581	3,610	4,480	2,870	2,570	2,520	3,098	6,100
コールマネー			1120	560	50	650	900	1,370	1320	500
再割引手形	1,924	1,105	4,130	1,427	676	564	787	955	1119	
その他	269	247	320	338	198	307	281	281	208	372
当期利益金	145	160	179	211	408	405	402	383	322	229
合計	22,301	24,081	26,976	28,471	32,690	31,626	33,132	36,003	38,076	40,925

第2表　浅野昼夜銀行損益計算書

	7上	7下	8上	8下	9上	9下	10上	10下	11上	11下
〈利益〉										
利息	81	129	141	211	190	192	283	249	528	1,277
割引料	611	828	940	1,132	1,312	1,186	1,204	1,215	1,292	928
有価証券収益		22	33	42	260	354	226	218	197	193
手数料	12	4	12	19	49	2	5	12	14	5
雑益	2	4	3	12	3	10	10	12	6	16
別途積立金繰入										464
前期繰越金	4	5	12	40	45	84	83	80	77	64
合計	710	991	1,151	1,455	1,860	1,828	1,811	1,788	2,115	2,948
〈損失〉										
利息	406	567	572	676	770	886	945	906	1,218	1,690
手数料	8	0	14	11	28	11	25	24	43	27
割引料	113	223	317	421	394	247	260	264	219	45
滞貸金償却										528
諸税	10	3	33	22	48	29	44	47	33	69
雑損	1	0	0	58	130	125	1			
諸経費	26	38	37	56	83	125	134	164	281	360
当期利益	145	160	179	211	408	405	402	383	322	229
合計	710	991	1,151	1,455	1,860	1,828	1,811	1,788	2,115	2,948

第3表　浅野昼夜銀行利益処分

法定準備金	8	10	10	20	30	30	30	30	24	11
別途積立金	55	50	50	50	70	50	50	30	24	
役員賞与金	7	7	9	17	21	19	18	22	18	10
配当金	70	70	70	84	198	219	219	219	188	188
配当率（%）	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6
退職恩給基金				5	5	5	5	5	4	5
後期繰越金	5	12	40	45	84	83	80	77	64	15

よる好況は浅野関連企業に高収益をもたらしたが、それを越えた資金を浅野総一郎は会社新設に費やしたからである。試みに大正期に設立（買収も含む）された傘下企業は、元（一九一二）年沖電気・東京湾埋立、二年浅野昼夜貯蓄銀行、四年浅野昼夜銀行・浅野スレート・大日本鉱業、五年浅野造船所、六年大島製鋼所・富士製鋼、七年浅野物産・浅野同族・浅野小倉製鋼・関東水力電気、八年神奈川コークス・庄川水力電気・北秋木材・鶴見木工、九年日本鋳造・信越木材・日本カーリット・京浜運河、一〇年内外石油、とほとんど毎年であり、合計二二社を数えられる。[16]『当行沿革』も「浅野総一郎氏ガ計画セル水力電気、埋立事業、其他ノ事業ニ関スル資金ノ需要ハ殆ンド際限無ク、到底当銀行ノ微力ヲ以テ満足ヲ与フベクモアラズ」と書いており、浅野総一郎の拡張を基本にした経営政策に翻弄されたといえそうである。

九年二月日本銀行から副頭取として迎えた綿貫吉秋を病気で失ったが、それを契機に、浅野総一郎が白石元治郎に代わって頭取に就任、また株式大暴落直後の三月末、綿貫の後任として永島二郎を専務取締役に迎えた。

株式暴落の結果「有価証券ノ評価差損額約七〇万円」に達し、「半期決算モ覚束無キ」状況となったが、「一部分消却シ、更ニセメント株増資ニ依リ引受タル新株ノ利益ヲ以テ補塡シ、残損額五五万円ニ就テハ、是等ノ株式ヲ浅野同族会社ヘ売却シ、更ニ相当低下シタル価格ヲ以テ買戻シタルコトトシ、手形ヲ以テ補塡」することで、漸く決算をすませた。浅野セメントは好成績を続け、この年も二五％の配当であったから、補塡が可能であったのであろう。

頭取に就任した浅野総一郎は赤坂、亀戸、浅草、神田、芝と次々に支店を開設、預金吸収に努めた。第1表を見る限り諸預金は、八年上期に二〇〇万円弱の落ち込みを見せるものの、その後は一貫して増加していることがわかる。八年三月三十日から三十一日にかけて浅野昼夜貯蓄銀行大阪支店が取付けにあい、合計八十万円ほどを支払っているが、同期の減少はその余波であろうか。支払資金は日本興業銀行大阪支店から二十万円を借り入れ、昼夜銀行本店から六十万円を送金し、貯蓄銀行京都支店からも二〇万円を送金して対応したが、「当時ハ関係諸会社モ未ダ疲弊セザリシヲ以テ、其方面ノ援助モ」多かったので、危急を脱せられた。

九年十二月には昼夜銀行自体が「小取付」にあって、総

額五十万円ほど預金の減少を生じた。原因は東京貯蔵銀行の取付けで、大野銀行がその影響で支払停止となり、両行本店が昼夜銀行本店に近接していたためにその影響を受け、「サラニダニ逼迫セシ手元準備金ハ、愈不足ヲ告ゲ」ることになった。結局総一郎が安田善次郎に懇請して、浅野同族会社に三〇〇万円の融通をうけて、急場をしのいだ。

以上の内容からすると、研究史の整理で示した「第一次世界大戦後の反動不況によって預金が減少する一方、浅野関係諸会社の資金需要が増加すると同時に、これらが固定化し、いきおい資金が枯渇するに至って、機関銀行たる当行の経営は、次第に急迫を告げてきた」という内容や、『安田財閥』中の「大幅増資をした直後の大正九年三月、反動恐慌が勃発すると、同行は保有有価証券（主として浅野系企業の株式）の暴落、貸付金の不良債権化、浅野系企業への救済融資資金の増大などにより、経営内容がにわかに悪化した」という内容は、いずれも妥当するものの、昼夜銀行経営破綻の主要因を説明していないことになる。つまり大正六年末に早くも現れた「銀行本位ニアラズシテ、事業家ノ金繰機関タル本能ヲ発揮スルニ至レリ」という経営姿勢と、「事業ニ関スル資金ノ需要ハ殆ンド際限」のない総一郎の拡張政策が、その真因であった。そして預金の減少や資金固定化、保有有価証券の暴落、貸付金の不良債権化等は、その現象形態だったことになる。

三　買収による昼夜銀行の救済

大正十（一九二一）年五月、浅野総一郎はドイツからの賠償船太洋丸の初航海に安田善次郎を招待し、上海およびマニラを視察した。そして船上で昼夜銀行の経営について話し合った。この経緯について『当行沿革』は次のように書いている。「総一郎氏ハ安田総長ヲ太洋丸ニ案内シ、名ヲ視察ニ仮リ、手ヲ携ヘテ上海ニ渡航セラレタルガ如キ、大ニ親睦ト意思ノ疎通ヲ図リ、将来ニ向テ期待セラレル所アリタリ、然ルニ当時密ニ当行ノ前途ヲ慮ル者漸ク多ク、安田総長亦是ニ観ル所アリ、浅野家ト提携シテ事業ニ投資セントセバ、先ヅ当行ヲ安田家ニ引渡シ、以テ禍根ヲ絶ツベキコトヲ唱道セラレ、徐々ニ総一郎氏ニ説カルル所アリシガ、浅野家ニ於テモ直ニ之ヲ快諾セラレタリ」。

これを読む限りでは、総一郎は善次郎の提案をむしろ待ち望んでいたと考えられる。総一郎は銀行経営に魅力を感

じていたのではなく、事業資金に魅力を感じていたのであるから、資金融通の目処さえたてばそれで十分なわけである。ましてや経営のいきづまっている昼夜銀行を引き取ってくれるのであれば、それに越したことはない。しかし事はそれほどうまく運ばなかった。

十年九月十九、二十の両日、齋藤恂（日本昼夜銀行に改組された時の専務取締役）等保善社から派遣された人々は昼夜銀行本店に足を運んで調査を行い、その結果「大略契約ヲ締結セラルル運ビトナリタリ」。しかし二十八日、善次郎が朝日平吾なる右翼に大磯の別荘で殺害されると、「保善社ニ於テハ驚愕一方ナラズ、危惧百出ノ形勢ヲ示スニ至リシカバ、到底他ヲ顧ルノ暇無ク、当行引継案ノ如キハ、全然放棄セラルルノ止ム無キ有様」となった。遭難時同行専務以下各支店長を自邸に集めて、譲渡後の諸般について打ち合わせ中であった総一郎の心中は、いかばかりであったのだろうか。

話が振り出しに戻り、自力で再建をめざすことになった昼夜銀行は、「専ラ支店ノ得意開拓ニ意ヲ用ヒ、資金充実ノ為奔走」することになった。そのため貯蓄銀行の支店しか置かれていなかった大阪（十年十一月）、京都（同年十二月）に支店を、浅野セメント採掘事務所のある都下青梅に出張所を設置した。前掲第1表をみると、諸預金額は十年下期に前期に比べて約二〇〇万円増加している。またその後も確実に増えているから、一同の努力はそれなりに結実したことになる。

しかし同時に諸貸付金はそれ以上増加しており、それに対応して借入金、コールマネー、再割引手形の合計額も増加している。つまり経営の質は、以前と変わらないままである。

次に第2表から、損益の動きを検討してみよう。当期利益は、九年上期を頂点として低落傾向にある。それは、「造船所東洋汽船ノ如キ配当漸減シ、其他ノ利息ノ入金無キモノ益増加セルニ従テ毎期減少」したためであった。実際九年下期に一〇％配当していた浅野造船所は、十年上期八％、下期五％と配当率を減らし、十一年上期には無配に転落する。また東洋汽船は、九年上期には十五％配当していたのが、以下一〇％、八％、六％、五％と配当率を漸減させ、十一年下期には無配となる。[17] こうした配当率の動きが、有価証券収益に現れているのであろう。

低落傾向にある利益と配当との関連を、次に第3表から

概観してみよう。七年上期から十年下期まで配当率は七%、十一上期から六%に落ちていることが理解できるが、別途積立金額は、九年上期をピークに減少している。また後期繰越金も微妙に減額している。つまり同じ配当率といっても、九年上期とそれ以降では余裕度が異なっており、十一年下期は、六%の配当のために法定準備金、別途積立金、退職恩給基金を削っているのがわかる。業容は次第に悪化しているのである。

先に経営の質は不変だと書いたが、むしろ悪化したという評価の方が正しい。十年末から十一年にかけて『当行沿革』には次のような文章がある。

手元準備ハ、同族会社ガ金融成リタル際、一時的緩和セラルル外ハ期毎ニ逼迫ノ度ヲ増スノミニシテ、十年末モ同族会社ノ資金調達ニ依リ辛クモ決算ヲ了リシガ、前途ハ到底維持困難ヲ免レ難キ状態トナリタリ、十一年ニ入リ同族会社ノ圧迫愈辛辣ヲ極メ、直接本支店ノ手元在高ヲ徴シ、是ニ依テ追窮セントシ、京阪方面ハ本店幹部ノ手ヲ離レ浅野総長自ラ回金ヲ命ゼントスルニ至レリ、蓋シ安田総長遭難後、浅野総長ハ専ラ金子、橋本ノ両氏ヲ信頼セラレ、常ニ両氏ヲ股肱トシテ画策セラレタルヲ以テ、当行ニ対スル総テノ処置モ、亦両氏ノ方寸ニ出デタルモノノ如シ、斯クノ如クシテ危険ハ日々加ハリ来リ、専務ヨリ収支予算ヲ立テ資金調達ヲ稟請セル上申書毎月三四回ニ及ビ、且ツ本店ニ於テハ同族会社ニ対シ常ニ五〇万円位ノ準備金ヲ秘スルノ止ム無キニ立至レリ、斯クテハ到底浅野総長ノ意ヲ満スベクモアラズ、仍テ総長ハ橋本氏ヲ当行ノ副頭取ニ任ゼントセシガ、専務ノ頑強ナル反対ニ依リテ中止シ、其他広島ヘ支店ヲ設ケ、専務ヲシテ開拓セシメ、自ラ京阪支店ヲ直轄シ橋本氏ヲシテ横浜並ニ本店ヲ支配セシメント企テラレシガ如キ、何レモ専務ガ反対ノ決心動カザリシモノアリテ、実行ニ至ラザリシガ、以テ如何ニ資金調達ニ煩悶セラレシカヲ窺フニ足ルベキナリ

まず読んでわかることは、頭取である浅野総一郎と永島二郎専務と指揮系統が二つあることであろう。浅野同族会社の資金繰りを第一とする総一郎と、その意向に添おうとする橋本梅太郎、金子喜代太[18]両取締役、それに対して銀行経営の最低限を守ろうとする永島二郎専務、というところであろうか。この『当行沿革』の著者（不明）も専務派と

想像できる。

銀行経営という視点からすれば、倒壊寸前ということになる。頭取の意に反して「常ニ五〇万円位ノ準備金ヲ秘スル」ことで、銀行経営を維持しなければならないとは、信じがたい状況である。

逆からみれば、それほど浅野同族会社は追いつめられていたということであろう。「手元準備ハ、同族会社ガ金融成リタル際、一時的緩和セラルル」状況とは、昼夜銀行の資金が同族会社によって固定化され、流動性を阻害されていることである。別言すれば、昼夜銀行の危機的状況とは、同族会社の危機的状況であり、それはまた浅野財閥の危機的状況を示していた。

当時の浅野同族会社を見るために作成したのが、第4表[19]である。同表は十一年三月末現在の同社貸借対照表であるが、それによれば、当時の同族会社は、簡単にいってしまえば、株金（資本金）と支払手形で、傘下関連会社の株式を所有していた、ということがわかる。そしてその支払手形の主要宛先別分類を表示したのが、第5表[20]である。浅野昼夜銀行が最も多く、全体の四二％を占め、次いで安田銀行で、全体の二八％である。つまり両行で七〇％であるが、当時の支払手形の多くは借入金の別名である。それを別に示すために作成したのが、第6表[21]である。同表は十一年七月現在の同族会社借入金額で、第5表の約四ヶ月後の姿であるが、浅野昼夜銀行と日本興業銀行が増加した以外ほぼ同額であることがわかるであろう。

問題は昼夜銀行に対する借入金額が、二〇〇〇万円を超えていることである。第1表に表示されている十一年上期諸貸付金額は、一八八九万円であるから、同族会社だけでそれを越えていたことになる。しかもその使途の大半は業績不振に喘いでいた浅野関連会社であるから、資金の固定化は避けられなかったであろう。「常ニ五〇万円位ノ準備金ヲ秘スル」必要は、確かにあったのである。

このような銀行経営の欠陥が顕在化し、浅野総一郎をして銀行経営を断念し、全面的に安田銀行に救済を仰がねばならなくなった事件が、十一年春に起こった。浅野造船所の整理であり、職工一六〇〇余名の解雇であった。

職工ニ給与セラレルベキ金額ハ四六万六千余円ニシテ、造船所ハ此資金ニ充ツル為メ、芝浦製作所ヘ地所ヲ売却シタル代金トシテ受取リタル手形四枚合計九八万余円ヲ担保トシテ、当銀行ノ裏書ニ依リ三井銀行ヨ

リ七〇万円ヲ借入レ、利息其他ヲ引去リ当行ヘ約六〇万円ヲ預ケ入レタリ、然ルニ造船所ノ不況ヨリ終ニ大整理ヲ為スニ至レル詳細ノ事項各新聞紙ニ依リ報道セラレシカバ、サラヌダニ兎角ノ噂アリシ際迚、預金者ニ刺激ヲ与ヘ、市内支店特ニ浅草支店ノ如キハ月々預金ノ引出多ク、前月末京阪方面ヘ送リシ月末資金ノ回送亦遅クシテ、差向造船所ノ入金ヲ以テ、不時ノ支払ニ充当スルノ止ヲ得ザルコトトナリタリ、而シテ造船所ニ於テハ五月八日ヲ以テ、解雇職工ニ対シ手当ヲ給与スベク声明セシニ拘ハラズ、前記ノ始末ニ由リ五日ニ至ルモ尚当行ノ準備成ラズ、七日ハ日曜日ナリシ故剰ストコロ六日一日ノミナリ、……斯クテ六日ニ至リ、窮策トシテ鋼管会社第二回社債額面二〇万円ヲ担保トシテ、日支炭鉱汽船会社ヲ経テ、当行ノ支払保証ニ依リ、徳永、堀江ノ両現物屋ヲシテ二〇万円ヲ調達セシメ、辛ウジテ造船所ノ支払ニ応ズル準備調ヒタリ

第4表　浅野同族会社貸借対照表

資産		資本・負債	
仮勘定	754	株金	35,000
有価証券	72,454	法定積立金	480
合資・組合	206	別途積立金	1,000
地所・家屋	4,688	社員積立金	13
立替金	1,962	同族勘定	5,242
受取手形	4,518	諸預り金	806
什器	40	借入金	1,575
鉱山部	817	支払手形	44,036
水力部	160	銀行当座	2,218
石炭部	185	その他	47
保険部	3	繰越金	752
貿易部	440	合計	91,172
浚渫部	129		
建設部	11		
製鉄部	722		
浅野造船所	3,833		
現金	0		
損益	234		
合計	91,172		

（単位：1000円）

第6表　同族会社借入金

浅野昼夜銀行	20,203
安田銀行	12,125
台湾銀行	4,656
第一銀行	3,468
興業銀行	2,790
中井銀行	170
布哇浅野昼夜	379
帝国生命	670
合計	44,463

（単位：1000円）

第5表　支払手形内訳

浅野昼夜銀行	18,531
安田銀行	12,135
台湾銀行	4,649
第一銀行	3,468
興業銀行	1,290
中井銀行	170
布哇浅野昼夜	379
帝国生命	670
その他	2,744
合計	44,036

（単位：1000円）

危ない橋をどうにか渡りきった様が明らかであるが、これを契機に「徹底的ニ救済」を求めることが決定された。

かくて保善社の結城専務理事や井上準之助日銀総裁、安田家を歴訪して救済を懇願した結果、井上日銀総裁は、事態容易ならざること、その影響の大きいことを考慮して、結城専務理事と資金貸し付けによるか、銀行譲り受けによるか、救済策の協議をおこなった。そしてハワイ浅野昼夜銀行は朝鮮銀行に譲渡、浅野昼夜貯蓄銀行は安田貯蓄銀行に合併、浅野昼夜銀行は安田銀行が買収、独立の銀行として経営されるに至ったのである。貯蓄銀行は吸収合併しながら、昼夜銀行は日本昼夜銀行と名称を改めたものの、別組織とした理由は、一般の人々をして、「負債ノ為メ安田家ニ買収ヲ余儀ナクセラレタリ」との印象を与えず、また「浅野氏ノ信用上ニモ得ル所アリ」との判断からであった。[22]

大正十一年八月十五日浅野系取締役は総退陣し、頭取に安田善四郎、取締役に安田善兵衛、齋藤恂、金原磊、島甲子二、永島二郎、榎本平七、監査役に飯田武也、永井正作が就任した。

それは経営にすぐ現れた。第2表に示されるように別途積立金を取り崩して、そして滞貸金の償却を開始している。五二万円余ではとても全額を償却したとはいえないが、それでも方向を明確化したのである。また借入金が六〇〇万円と約二倍に増加しているが（第1表）、隠れていた借入金を表に出したのであろう。その後同行は、堅実な発展を開始し始める。

むすび

以上浅野昼夜銀行の安田財閥への譲渡を概観してきた。譲渡と表現してきたが、実際は同行の救済であった。浅野泰治郎・良三『浅野総一郎』が述べているような、「不成績ではない銀行」などではなかった。配当は続いていたが、指揮系統も乱れ、落第の銀行経営であった。その要因は、浅野総一郎にあった。同行の窮状は反動恐慌など経営環境の悪化だけに起因したわけではなく、銀行経営を無視した総一郎の拡大政策の、その意味での放漫経営が原因の第一であった。経営に対する経営者の責任は重いと言わねばならない。

（1）『稼ぐに追いつく貧乏なし――浅野総一郎と浅野財閥

――』（東洋経済新報社、平成十年十一月）

(2) 同右、一四四～五頁。原資料は、浅野泰治郎・良三『浅野総一郎』（浅野文庫、大正十一年）五三七頁で、「銀行業としては、決して不成績ではなかったが、我が国金融界の覇権を握れる安田翁は、言を尽くして、銀行業兼営の非を述べられ、総一郎に事業家として終始するやう切言されたので、翁の忠言を容れることとなり、昼夜銀行の一切を挙げて安田家に譲渡することとなった」と書かれている。「銀行業としては、決して不成績ではなかった」と書いてあることからすると、救済を求めて譲渡したとは考えにくい。しかし総一郎夫妻の金婚式を祝って編纂され、さらに総一郎の喜寿を祝って増補改訂された著書であるから、経営上の失敗を如実に示すとは考えにくい。事実の一面を物語っているとはいえ、さらなる検討が求められるのは当然であろう。

(3) 「安田保善社とその関係事業史」編修委員会『安田保善社とその関係事業史』（同、昭四九年六月）五六六頁以下。

(4) 『経営史学』第十六巻第一号（昭和五十六年四月）。

(5) 同右、四八頁。

(6) 富士銀行編『富士銀行一〇〇年史』（昭和五七年、二三二、三頁）。

(7) 由井常彦編『安田財閥』（日本経済新聞社、昭和六十一年八月）中「第五章　結城・森改革と安田財閥の再編成、2浅野諸事業への投・融資の拡大とその反動」、なかんずくその「二浅野財閥の安田財閥への全面的依存体制」（三六三頁以下）を参照。

(8) 前掲『安田財閥』の注（四〇五頁）によれば、日本昼夜銀行『沿革大要』（富士銀行所蔵）となっているが、富士銀行企画部金融調査室金融資料課にある稿本には、表紙に「日本昼夜銀行『当行沿革』」と記載されている。したがって本稿では、『当行沿革』に統一する。わずか五〇頁弱の小冊子で、最初には「沿革大要」とあり、「震災ニ因リ書類多ク焼失シ、調査資料乏シク不備ノ感アレドモ、古参行員ノ口碑ニ因リ、若シクハ役員ノ記憶ヲ辿リ、大要ヲ記スコトトセリ」と書き出している。内容からすると、『安田保善社とその関係事業史』も『富士銀行一〇〇年史』もこの稿本をもとに記載していると考えられるので、以下本稿もこれに依拠して記述を進めたい。

(9) 前掲『安田財閥』三六六頁

(10) 同右、三六七頁

(11) 前掲『当行沿革』。この稿本には頁数はないので、引用頁をいちいち示すことができない。以下断りのない限り引用は、この稿本によっているが、文中の数値だけは読みやすいように改めてある。

(12) 前掲『稼ぐに追いつく貧乏なし――浅野総一郎と浅野財閥――』六四～六六頁

(13) 白石元治郎は総一郎の次女マン子の婿、鈴木紋次郎は四女タカ子の婿である（前掲『稼ぐに追いつく貧乏なし

――浅野総一郎と浅野財閥――』一三九頁）。

(14) 浅野昼夜銀行『営業報告書』より作成。6年以前の同行営業報告書を見つけることができなかったので、七年上期から日本昼夜銀行と改称した十一年下期までを作表した。

(15) 浅野昼夜銀行『営業報告書』付録の「株主名簿」による。

(16) 前掲『稼ぐに追いつく貧乏なし――浅野総一郎と浅野財閥――』一二〇頁。

(17) 同右、一六九頁。

(18) 金子喜代太は、総一郎の長女マツ子の娘婿である。

(19) 浅野同族会社「報告書（大正十一年四月分）」より作成。以下諸表を作成するために使用した資料はいずれも富士銀行資料で、「浅野昼夜銀行の経営引受にあたり集められた資料――浅野セメント社長から井上準之助に宛てた――」および「経営引受についての資料――一括九種――」中に含まれていた資料である。

(20) 浅野同族会社「報告書（大正十一年四月分）」より作成。

(21) 「浅野同族関係事業所資金調」中「借入金同利息及担保品、同配当調」より作成。大正十一年七月現在の同族会社借入金である。

(22) 「浅野買収案」大正十一年七月十日

〔付記〕 本稿を作成するにあたり、資料閲覧に快く応じてくださった富士銀行金融調査室金融資料課の皆さん、特に竹内英晴館長および朝緑康平氏に心からお礼を述べます。

（さいとう　さとし・関東学院大学経済学部教授）